インド工場建設の思い出

松沼　厚士（昭和 25 年電化卒）

昭和 25 年 3 月，私は電気化学科を卒業，直ちに岡田乾電池株式会社に入社した．その頃は乾電池の用途は主として灯火用（懐中電灯，自転車用ランプ等の電源用）であった．

その為，宿命的に夜の短い夏には需要激減，一方で夜の長い冬は最大の需要期であり，従って工場は夏は閑散，冬は需要に追われて多忙というのが通常のパターンであった．（電池産業の現状からはとても考えられない事ではあるが．）私が入社した最初の夏には，工場が半日操業という状態がしばらく続いた事を記憶している．先輩方から「乾電池屋は冬は電池商売で忙しいが夏はアイスキャンデー売りで凌ぐ」というような比喩を聞かされた事もあり，将来性のある有望な産業とは思われなかった．が，入社後，間もなく朝鮮動乱が勃発し，米軍は通信機用電源として大量に使われる乾電池の補給を，日本の電池メーカーに依存する事になり，所謂特需が始まったので，工場は大変な活況を呈しフル生産が続けられ，季節変動も消滅してしまった．

ここで特筆すべきは，米軍通信機用電源としての電池性能は非常に厳しく，かなり高い品質レベルが要求されていたもので，それをクリアする為の必死の努力の結果，日本全体の乾電池の品質が格段に向上したことである．

一方，国内需要も小型ラジオなど携帯機器の商品化が着実に進み，それらの電源として乾電池の需要は増大していた．そのような次第で，私は一時は転職を考えていた事も忘れ，結局定年後も含め 40 数年乾電池一本で過ごしてきた．

この間，多くの出来事があったが，最も印象に残っているのは昭和 45 年から始まったインド工場の建設と 2 年半に及ぶ駐在である．

今でこそインドは近代化が進みその発展が大いに期待されているが，当時はまだ所謂開発途上国で，政府は国内産業の育成に努めており，海外からの企業誘致も積極的に進めていたが，大学を出たけれど仕事がないというような失業者が街に溢れていた状況であった．昭和 45 年 7 月に技術援助契約が締結され，当社にとって始めての海外進出事業がスタートし，私はインド工場建設部長としてこの事業に参画した．先ず 4 回の出張で各種の事前調査を行った．中央政府関係官庁への事業計画の説明，工場サイトの選定，材料部品の納入業者の選定及び試料の品質確認，工場操業の核となるべきインド人技術者の採用等，相手側に乾電池製造の経験が無く，全くゼロから始まる調査であったので，色々と苦労したが，中でもインド人技術者の採用は最も注力し最も苦労した問題であった．それは，この事業の成否は，如何に工場を早く立ち上げられるかにあり，その為には工場運営の中心となる優秀なインド人技術者の確保が最重要問題であると考えていたからである．

「技術者募集」の広告に対する反応は凄まじく，送られてきた履歴書は 6 千通を越えていた．その中から書類選考で二百名を選出し，日本側で作成したペーパーテストで更に百名に絞り，面接で最終決定を行った．技術者採用の決定は日本側が行う事としていたので，私が面接の責任者として百名全員の面接を行い最終的に 15 名を採用した．

前述のように就職難時代であったから，社長の所には知人，友人から多数の依頼が来ており，それを排除する為「社長といえども採用には参画できない」という事とし，不適格者のコネ入社を防ぐ事としたが，面接はインド訛りの英語と日本訛り英語との対話であり，被面接者も理解に苦労したと思われるが，Yes や No のゼスチャーが日本の習慣と異なる事もあり理解にとまどう事も多く，何とか被面接者の応答を通じて彼らの考えや性格を誤り無く理解すべく，私も責任ある立場で大変苦労した事が強く記憶に残っている．

採用された 15 名の技術者は，所要の手続きを経て来日し，海外技術者研修協会の横浜研修センターに入所，6ヶ月間の教育実習を受けた．先ず 2 週間

の日本語研修を受け，以後工場のそれぞれの部門で実習が行われた．

彼等の外国語習得能力は素晴らしく，僅か２週間の日本語研修であったが，工場の監督者，作業員との意思疎通は片言ながら出来ていたのは驚きであった．

こうして，6ヶ月間の研修を無事終了して彼等は帰国，日本からの製造設備の工場到着時に工場へ集合し，日本からの建設グループに協力，一体となって設備設置に全力を傾倒，予定期間よりかなり早く試運転を行い，更に各種調整及び製品の品質確認を経て本格生産を開始したが，生産は極めて順調に軌道に乗り，間もなく政府の許容生産量（Licensed Capacity）を超えるまでに生産実績を上げる事が出来た．当時，この政府の許容生産量をクリア出来ない工場が多数あった事もあり，この実績は高く評価され，工場建設は完了となった．これにはインド人技術者の真摯な努力が大きく貢献していた事は明白で，彼等の採用に当ったものとしては，何にも勝る大きな喜びであった．

本格生産開始後，開所式が，時のギリ大統領の臨席の下，中央及び地方政府を始め多くの関係者が参列，盛大に挙行されたが，日本の建設グループは，工場建設を極めて短期間に完遂したという実績に対して会社から表彰され，私は代表としてギリ大統領から銀製の記念皿を手渡され握手するという光栄に浴した．この事は私の 40 数年の電池技術者としての経験の中で特筆されるべき忘れられない思い出である．

〈本原稿は，卒業年度（昭和）の末尾が 0 あるいは 5 の同窓委員（クラス）の方々にお願いして書いていただいたものです〉

会員の皆様へ

国大化学会会長
米屋　勝利

同窓生と在校生の交流のための OB 著書寄贈のお願い

国大化学会では学生の身近に先輩の著書があれば，“OB と語る会”と相まって同窓生と在校生の交流が図れると考え，ご自分の著書（共著も含めて）をお持ちの方々に，下記の要領で図書の寄贈をお願いすることになりました．

ご寄贈いただいた図書は同窓会事務室隣の就職資料室の書架において学生が閲覧，貸し出しもいたします．

ご寄贈のほど，よろしくお願いいたします．なお，ご不明の点があれば，何なりとご照会ください．

記

寄贈書籍　自著　２種類まで
送付方法　〒240-8501　横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5
横浜国大工学部物質工学科内　国大化学会事務局　宛て
郵便か宅配便（着払いでお願いいたします）

問い合わせ先　庶務・会計 G　堀　雅宏　045-339-3983
關　金一　045-339-3947
迫村　勝　045-339-3946
国大化学会事務局へのメール　yokochem@ynu.ac.jp